

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月14日現在

機関番号：23803
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22592500
 研究課題名（和文） 成人教育に基づく助産師の妊婦健診・ケア能力形成プログラムの検討
 研究課題名（英文） Study of Adult Education Style Program for Developing Midwives' Skills in Antenatal Examinations and Caregiving.
 研究代表者
 松岡 恵（MATSUOKA MEGUMI）
 静岡県立大学・看護学部・教授
 研究者番号：90229443

研究成果の概要（和文）：大学院修士課程で導入した成人型教育による妊婦健診の診断・技術力形成過程を明らかにする目的で、1. 診断・技術力への自信に関する従来型教育との評価票による調査、2. 学習過程に関する学生の振り返り記録と面接、3. 学生の学習過程に関する指導助産師・産科医への面接を実施した。その結果、成人型教育を実施した学生は診断の根拠となる情報が多く、包括的に妊婦をとらえるよう学習をしていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：We conducted a study of an adult education style course established in a masters' degree program to find out how students' diagnostic and related antenatal examination skills developed. The study consisted of: 1. A survey using a list of evaluation standards comparing the course with standard educational courses with regard to students' confidence in their own diagnostic and related skills 2. Review of retrospective records kept by the students throughout the course and interviews of the students 3. Interviews of midwives and obstetricians who taught the course about how the students' learning had progressed We found that the students who received the adult education style course had learned to use extensive information as the basis for diagnoses, with a view to getting a comprehensive understanding of each woman's pregnancy.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：助産師教育、助産診断能力、健康教育、妊婦健診、リフレクション、成人教育、教育評価

1. 研究開始当初の背景

我が国における産科医療の最重要課題は、

産婦人科医不足を理由とする分娩取扱施設の減少である。その対策の一つとして、助産

師がローリスク妊産褥婦を管理し、産婦人科医がハイリスクケースに集中できる産科管理システムを構築することが求められている。これを進めるためには、日本の助産師養成課程においても、先進諸国同様に、助産師の妊婦健診能力養成を強化していくことが必要だと考えられる。先進諸国の助産師養成課程では、養成課程全体を通して、臨床実習と学校での講義・ゼミが併行して行われているという特徴がある。欧米の臨床と座学を並行して行う教育は、体験し、振り返り、理解し、伝達するという学習過程をふまえた成人教育学の枠組みによるものである。

これまでの我が国の助産師教育は、講義と実技演習による知識・技術教育が主であり、成人である学習者の特性を踏まえたプログラム展開が行われていなかった。また、卒業までに求められる実践経験内容は、我が国では継続ケース1例以上と規定されているのみだが、先進諸国では妊婦管理100例以上の経験が求められている。これは、先進諸国の助産師が、ローリスク妊婦の妊婦管理を自律して行うことが求められているためである。

そこで本研究では、大学院修士課程における助産師養成課程の中で成人型教育による妊婦の診断能力の教育効果を明らかにすることを目的とした。これにより、先進諸国同様、助産師が自律してローリスク妊婦の診断と健康教育が行える能力を養成するための助産師養成課程での妊婦健診能力に関する効果的な教育方法が提言できることを期待する。

2. 研究の目的

- 1) 成人教育学に基づく妊婦健診能力教育プログラムの効果を明らかにする。
- 2) 成人教育に基づく妊婦健診能力教育に有効な体験の質を明らかにする。

- 3) 日本における助産師外来の担当助産師の能力基準と準備教育の実態を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は4つの調査から構成している。

<調査1> 準実験研究

目的：知識の統合、技術への自信の程度について、従来型教育プログラムとの比較により、成人教育学の基づくプログラムの教育効果を明らかにする

対象：実験群10名、対照群9名

介入内容：

両群に共通する教育プログラム：妊娠期の助産診断・技術に関するPBLによる学習を14時間行い、妊娠32週以降の妊婦を分娩まで継続して受け持ち妊婦健診および妊娠期の保健指導に関する実習を行う。

実験群のみに行う教育プログラム：妊娠期の助産診断・技術に関するPBL学習後、妊婦健診実習を11週間行い、のべ20例以上の妊婦健診を実施し、毎週90分以上のケースカンファレンスを行う。

測定用具：全国助産師教育協議会による助産師教育のコアカリキュラムを参考に設定したアセスメント項目25項目について「非常によくできる」から「できない」までの5段階リッカート尺度で測定する自作の助産診断自己評価用紙を使用した。測定時期は基礎的な学習（PBL妊婦事例）終了時と継続ケース妊婦健診2回目以降（38週以降）とした。

さらに、妊婦健診で毎回必ず行う診断項目2項目と、妊娠36週以降毎回行う内診で診断する項目3項目について「自信がある」から「全く自信がない」の5段階リッカート尺度で測定する自作の評価要旨を使用した。測定時期は妊婦外来実習初回と継続ケース妊婦

健診 2 回目以降 (38 週以降) とした。それぞれに評価用紙には評価の理由を記載する自由記載欄をつけた。

分析は、項目、群、時期別に反復一元配置分散分析を行った。統計処理には SPSSVer14 for windows を使用し有意水準は 5% とした。自由記載内容は、研究者以外の第三者に匿名化した文書データ作成を依頼し、意味内容が分かる最小単位に細分化して共通内容をまとめカテゴリー化した。

<調査 2> 質的因子探索研究

目的：成人教育学に基づく教育プログラムにおける助産師としての態度・姿勢の変化の過程を明らかにする。

対象：調査 1 における実験群 10 名

データ収集方法：11 回の妊婦健診実習のリフレクションに用いた妊婦健診体験記録の記載、および妊婦健診実習終了後に行う半構造化面接による。記載内容は、自分にとって重要だと感じた経験とその理由、そこから考えた自己の課題、その日の妊婦健診実習を通して自分が変化したと思う内容である。面接は、面接プロトコルに基づく半構造化面接とし、妊婦健診実習を通して自分に起きた変化、変化のきっかけとなった出来事について、自由に語ってもらう形とした。面接内容は承諾を得て録音した。記載された体験録および面接内容は、研究者以外の第三者に匿名化した文書データ作成を依頼した。分析は学生の成長、成長に影響する体験について、内容を抽出し共通項目をまとめ、カテゴリー化した。

<調査 3> 質的因子探索研究

目的：成人教育学に基づく妊婦診断能力教育に有効な体験の質を明らかにする

対象：妊婦健診実習を指導した臨床指導者 4 名と産科医 3 名

データ収集方法：面接プロトコルに基づく、半構造化面接を行った。面接は、妊婦健診実習を通して感じた学生の成長、変化、学生の変化のきっかけと考えられる事例、状況、学生の実習環境に関する課題について、自由に語ってもらう形とした。

面接内容は承諾を得て録音し研究者以外の第三者に匿名化した文書データ作成を依頼し、意味内容が分かる最小単位に細分化して共通内容をまとめカテゴリー化した。

<調査 4> 文献研究

目的：日本における助産師外来実施施設の実施内容、助産師の基準、研修方法を明らかにする。これにより助産師外来の担当者に必要とされる能力養成という視点から大学教育における助産師養成課程の課題を明らかにする。

方法：「助産外来」「妊婦健診」「妊婦診断能力」「能力基準」「助産教育」をキーワードにして 2004 年から 2009 年までの原著論文、報告、総説、解説を医学中央雑誌から検索した。

4. 研究成果

<調査 1>

妊婦健診のアセスメント、診断技術に対する自信は、実験群、対照群ともに妊婦健診初回と比較して経験を積んだ後は、「胎位」、「妊娠の経過」、「妊婦の訴えに対する助言」で有意に高くなっていた。実験群が対照群と比較して有意に自信が高かった内容は、「分娩様式の経過の予測」、「健康相談の親準備について」であった。

自由記載の内容から、4 つのカテゴリー、17 のサブカテゴリー、56 のコードが抽出された。

その内容を対象群と実験群とで比較した。対照群では、自己の緊張によるストレスや診

断技術を手順通りに実施したことについて記載していた。しかし、実験群では、対象者によりよく伝える事や、指導を受けた内容を踏まえた内省、技術についても手順通りだけでなく、診察がよりスムーズに行えるための課題についての記載があった。以上のことから、実験群では、対照群よりもより質の高い診断、技術に向けた内省ができていたことが推察された。

<調査2>

成人型教育を受けた学生の妊婦健診実習の振り返りの記述内容を分析したところ、次のような結果になった。

対象学生の妊婦健診実習の経験回数は9～12回、振り返り記録の記載回数は6～11回であった。内容分析の結果、10のカテゴリーと32のコードが抽出された。学生は、妊婦診断実習の中から、複合的な情報を引き出し総合的に判断すること、安心感を与える情報伝え方、具体的な助言の引き出しを増やす、対象者と一緒に考えること、基本的な専門知識の事前学習、診断技術の事前練習の不足を再認識していた。対象者と向き合うことで、自分の判断、発言の重みに気付いて怖さを感じ、実際の助産師業務を見ることから助産師の役割の大きさを知るとともに、医療者としての責任を自覚していた。さらに、妊婦によっていろいろな心理があり、自分が先入観をもって妊婦に接していたことに気づき、妊婦の気持ちに寄り添うことの重要性を再認識していた。

次に、成人型教育を受けた学生の妊婦健診実習終了後の面接の内容分析の結果、学生の学びに関する11のカテゴリー、29のサブカテゴリー、37のコード、学生の学びを促進する指導者のかかわりに関する9のカテゴリー、33のサブカテゴリーが抽出された。

学生の学びに関するカテゴリーは「妊婦・家族の個別性への配慮」、「妊婦とのコミュニケーションのあり方」「効果的な妊婦への保健指導の方法」「学内の学習と実習での経験をつなげる」、「先を見越したかかわりの大切さ」、「妊娠期からの継続ケアの意味」、「助産師の役割と態度」、「助産技術の習得」、「助産技術の未習得」、「実習準備のあり方」であった。そして学生の学びを促進する指導者のかかわりに関するカテゴリーは「適時・適切な教員からのアドバイス」「教員からの後押し」、「教員と学生との距離の置き方」、「教員がそばにいる事の安心感」、「教員による記録の指導」、「指導助産師の模倣」、「助産師のアドバイス」、「モデルとしての指導助産師」、「中間カンファレンスでの評価と目標の明確化」であった。

<調査3>

成人型教育を受けた学生の妊婦健診実習に関わる指導助産師と産科医を対象にした面接調査の結果、14のカテゴリーと35のコードが抽出された。カテゴリー間の関係进行分析したところ、指導者は学生の成長を「緊張」、「積極性」、「技術の自信」、「助産ケアの深まり」という四つの側面から認識し、それぞれに対して学生へのかかわり方に配慮をしていることが明らかになった。また、「助産師の本質は分娩介助」であり、妊娠期のケアは分娩時のケアにつながるものと認識し、学習を深めるに「より多くの症例を経験」し、「より多くの助産師とかかわる」ことを促したいと考えていた。

<調査4>

助産師外来の実態および担当助産師に必要とされる能力に関する、実践報告および実態調査を合わせて29件の文献を検討した。

その結果、助産師外来の実践内容は、統一されていない現状であり、妊婦健康診査よりも保健指導が主であったが明らかになった。さらに助産外来担当助産師の基準は、助産師経験年数3～5年とする施設が多く、おおむね2009年発表のガイドラインに見合うものだったこと、また担当助産師の現任教育は施設ごとにさまざまであったことが明らかになった。そして、助産外来担当助産師に必要とされる実践能力として各文献に共通する内容は「正確な診断能力」「保健指導能力」「連携能力」であることが明らかになった。

以上、四つの調査結果から、

1) 成人教育学に基づく妊婦健診能力教育プログラムは、従来型の教育と比較して分娩様式の経過の予測、「健康相談の親準備について」に対する自信が付き、アセスメントとケアの質でより高いものを求める姿勢が見られることが明らかになった。

2) 成人教育学に基づく妊婦健診能力教育における学生の成長は「緊張」「積極性」「技術の自信」「助産ケアの深まり」の四側面から認識され、それぞれの側面に対する指導助産師や教員の配慮が認められた。しかし学生の成長に有効な体験を具体的に明らかにするには至らなかった。

3) 日本における助産師外来の担当助産師の能力基準は、2009年発表のガイドラインに基づいていた。準備教育については施設及び個人の自助努力にゆだねられている実態が明らかになった。

今回の調査は、成人教育学に基づく妊婦健診教育プログラムの短期的教育効果の評価し一定の効果があることを明らかにした。今後は、分娩介助実習後などより長期的な効果についても検討していく必要があると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計2件)

- ① 松岡恵、勝又里織、太田尚子、Growth and Change in Midwifery Graduate Students During antenatal Care Practice and Causal Factors Thereof、The Mid-Pacific conference on Birth and Primal Health Research, 2012年10月27日、Honolulu、USA
② 高木静、鈴木恵、松岡恵、妊婦健診能力育成に向けての課題～助産外来の現状からの考察～、第25回静岡県母性衛生学会、2012年9月1日、静岡

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松岡 恵 (MATSUOKA MEGUMI)
静岡県立大学・看護学部・教授
研究者番号：90229443

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者

太田 尚子 (OTA NAOKO)
静岡県立大学・看護学部・准教授
研究者番号：50285053

勝又 里織 (KATSUMATA SAORI)
静岡県立大学・看護学部・講師 (2010～2011年)、杏林大学・保健学部・講師 (2012年)
研究者番号：00514845

山田 貴代 (YAMADA TAKAYO)
静岡県立大学・看護学部・助教
研究者番号：40453063

鈴木 恵 (SUZUKI MEGUMI)
静岡県立大学・看護学部・助教
研究者番号：60551736

高木 静 (TAKAGI SHIZUKA)
静岡県立大学・看護学部・助教
研究者番号：60581494